

## 李通玄の華嚴經觀 (2)

——特に十処十会について——

稻岡智賢

### はじめに

李通玄の『華嚴經』に対する見解を探ろうとするとき、彼が此の經を「十処十会四十品」の經典として捉えていることは彼の独自の立場を示す一つであつて、これは検討するに十分意義のあるものであると思われる。そこで前号に於いては、その一貫として「第三禪天会・仏華品」について些かの考察を試みた。<sup>(1)</sup>その結果、「三十九品」の經が「四十品」として考えられることについては、一応その立場を理解することができた。それ故、今彼の「十処十会」説についても、古来より言われるように「七処九会」として『八十卷華嚴經』を考えていないことは、理解に難くない。けれども、「第三禪天会・仏華品」の「一処一会」が加わるのみであるならば、「八処十会」との構造でなければならない。それに

改めて言うまでもなく、『八十卷華嚴經』に於いて処数と会数が異なつて数えられるのは、「普光明殿会」が三度登場するためであつて、ここにその数の相違の所以があるのであるから、「十処十会」というような処数と会数を同数とする考え方は、極めて不可解なものと言わなければならぬ。そこで今回はこの点について考察することにより、彼の華嚴思想を多少なりとも鮮明にしていくこととしたい。

### 第一節、十処十会説の概況

さて、李通玄が「十処十会」について論じている中、次の箇所はその内容をよく示している。

今一法界内に於いて其の進修方便行相門に隨う中、処に寄せて法を表わすに、以て其の十処十会を分かつとは、

第一、菩提場会

第二、普光明殿会

第三、須弥山顶会

第四、昇夜摩天会

第五、昇兜率天会

第六、昇他化自在天会

第七、昇三禅天会

第八、給孤独園会

第九、覺城東大塔廟処会

第十、於一切国刹及塵中一切虚空法界会

名づけて十処十会と為す。

(因36・七六二b)

以上、彼の言う「十処十会」の中、「第一会」から「第六会」までの区分は、通常言われるものと等しく、珍しき点は見られない。しかし、「第七会」以降にも二度重ねて説かれる「普光明殿会」を「第二会」の一会に纏めたことと、「第七会」から「第十会」については、彼独自の区分であって、明らかに伝統的な区分とは一線を画している。但し、此の中「第七会」については前号において考察した「第三禅天会・仏華品」であるから、今はその検討はしない。そこで今回は「普光明殿」を一会に纏めていることと、「第八会」以降の彼独自の区分について考察を試みていくこととしたい。

## 第二節、普光明殿会

それでは始めに「普光明殿会」を一会に纏めていることについての考察からしていくこととしよう。さてこの点を考察するに先立って、まず注意しておかなければならないことは、彼は三度登場する「普光明殿」が同処であるが故に、無条件で一会に纏めたのではないと言うことである。というのは、後に彼が「四に総じて会数を陳ぶるを明かす」中で四に総じて会数を陳ぶるを明かすとは、中に於いて大意に其の義に三有り。一に総じて会数を挙げ、二に其の会意を陳べ、三に仏の出世の所由を説く。一に総じて会数を挙ぐとは、其の会十有り。

二に其の会意を陳ぶとは、

第一会、菩提場中に在りとは	……中略……
第二会、普光明殿に在りとは	……中略……
第三会、昇須弥山顶帝釈宮に在りとは	……中略……
第四会、夜摩天宮に在りとは	……中略……
第五会、兜率天宮に在りとは	……中略……
第六会、他化自在天宮に在りとは	……中略……
第七会、第三禅に在りて説くとは	……中略……
第八会、普光明殿に在りとは	……中略……
第九会、普光明殿に在りとは	……中略……

第十会、法界品に在りとは

……中略……

(㊥ 36・七七一c~七七三c)

と述べているのである。つまり彼はこのように経説の順序にしたがって、「普光明殿」を三会として扱う立場を既に自らの中に認めているのである。或いはまた、「第三に重ねて仏の所説法処及び座体を叙ぶる」中では、

一に説法処及び意趣を叙すとは、其の処に十有り、其の意趣に十二有り。

第一、菩提場菩提樹下の一会、熙連河の辺に在り。……中略……

第二会、普光明殿に於いて此れ上を承る。……中略……

第三会、須弥山の頂きに於いて十住を説く。……中略……

第四会、夜摩天宮に十行を説く。……中略……

第五会、兜率天宮に十廻向を説く。……中略……

第六会、他化自在天宮に十地を説く。……中略……

第七会、第三禪に在り。……中略……

第八会、普光明殿に十定及び如来出現品を説く。……中略……

第九会、又普光明殿に在りて離世間法を説く。……中略……

第十会、給孤独園に在りて法界品を説く。……中略……

第十一会、覺城の東に在り。……中略……

(㊥ 36・八七四b~八七五b)

と、両者を合わせたような見解もみせているのである。「処に十有り」

とは「普光明殿会」を「一会」として数え、「意趣に十二有り」とはこれを開いて数えたものと考えられるが、但ここで現実には「十一会」のみ示していることは、疑問であると言わねばならない。これについては第三節の二で述べることで、今は彼にこうした見解があったことを示すに止めたい。

それではこのような見解を呈示しているにも拘らず、どうして彼は『華嚴經』を「十処十会」より成るものと規定していくのであろうか。もちろん、後者の場合は「処に十有り」「意趣に十二有り」と明言しているから、或いは「意趣」の語を「会」に置換して考えればさほど問題とはいえないかもしれないが、しかし前者は「十会」と言いつつもその数え形に相違があるわけであるから、この点はこの様に理解していくべきか明瞭にしなければならぬであろう。そこでこれをいかに考えていくべきなのか、それを本節の課題としたい。

さて、まず彼が「普光明殿会」を一会として纏めていこうとする理由を探ってみるに、『新華嚴經論』巻第七に次のように論じているのを見ることが出来る。

今普光明殿に於いて重重して三会を言うとは、此れ是の如きに非ず。総じて是れ一時頓印の法なり。經に云うが如し。『如来は一言説中に於いて、無辺の契經海を演説したもう』と。但、法門品類により法を表わすが為の故に、菩薩の名は殊にす。是れ先来・後來の衆には非ず。法界海の内に於いて情を以て前後の想を作すべからず。

本法と違うが故に。一念の内に於いて三世の事を現ずるは衆生の為なるが故なり。本法に於いて三世有るには非ず。此れ本法を明さんが為なり。末に従うべからず。前に已に車を覆えすとも後須らく轍を改むべし。直ちに先徳を推し以て亀鏡と為すべからず。経意を検参するに都て重会の名無し。文字を以て叙ぶれば法門に重意有るに似るを致し品中の経意を観ぜざるも、総じて是れ其の前後通括して一時一際一法界の智用の法門なることを叙ぶ。十定品・離世間品の如く、皆「爾時世尊、摩竭提国菩提場中に在して始めて正覚を成じたまい、普光明殿において刹那際三昧に入りたまう<sup>3)</sup>」と云うは、但、法位に随いて菩薩の名は別するも、是れ如来の去已重来には非ざるなり。普光明殿を以て法界果智の体と為すが故に。一時の際に於いて其の理事を会し、無作の定門を離れず。十定門を以て是れ法界の体となすが故に。普賢行を以て是れ法界の用となす。即ち離世間品是れなり。此の二品を会すに、普光明殿の果徳の大宅・智の本都を離れず。此の如く、三度の説は総じて是れ一刹一法界一會の説なり。

(⊙36・七六二a~b)

と。以上の彼の文から伺えるように、彼はこの「普光明殿會」を異時の説とは見ていないのである。彼にとって「普光明殿會」は全て「始成正覚」時の所説に外ならないのである。とはいえ、それを論証するために「十定品・離世間品の如く、皆『爾時世尊、摩竭提国菩提場中に在して始めて正覚を成じたまい、普光明殿において刹那際三昧に入りたまう』

と云う」等と述べているのは、些か行き過ぎと思われなくてもない。<sup>4)</sup>或いはまた「経意を検参するに都て重会の名無し」と論じているのは、その論証の方法に多少言葉尻を取り過ぎていたとの感情を抱かせるかも知れない。しかし裏面から見れば逆にここにむしろ「普光明殿會」を一會と考えなければならぬとする彼の姿勢がうかがえるとも言えるのであるまいか。ともあれ彼がこのような論証を用いても「普光明殿會」を一會として理解していかねばならない所以は、「普光明殿を以て法界果智の体と為す」「普賢行を以て是れ法界の用となす」と論じているように、「普光明殿」を以て法界を象徴させていこうとするその立場にこそある。法界の体或いは用を明かすものとして「普光明殿會」を考えていくならば、そこに時の推移があるう筈がない。したがって「法界海の内に於いて情を以て前後の想を作すべからず」と論ずるも当然といえよう。このように「普光明殿」は法界を象徴するものとして考えられるから、或いは時として、

(⊙36・七六二b)

十処十會は総じて普光明殿に在りと、端的に言表されることにもなるのであろう。少なくとも彼にとってこの「普光明殿會」は他の會と一線が画され、法界の象徴としての重要な會として考えられているのである。<sup>4)</sup>

以上、ここに三度登場する「普光明殿會」を一會として纏めて考えていこうとする彼の立場があるのである。

ところで、このような立場があるならば、先述したように「四に総じ

て会数を陳ぶるを明かす」中では、「普光明殿会」を三会それぞれ独立させて考えていくのであろうか。その点を明解にするために、改めてここで述べられている内容を確認してみることとしよう。まず「第八会普光明殿に在り」として第八会を明かす中で、彼は次のように述べている。

古人の此の会を釈して重会の普光法堂と為すとは同じからず。意是れに如ず。以に名言教中に両度・三度重ねて普光明殿を叙ぶるに即ち重会乃至三会等と云うを見ざるが故に。其の真意を失うなり。豈他をして去來の見を作さしめるべきや。……中略……但、此の普光明殿は是れ如來の自性・一切智種智の都體なるを明かすなり。依報の所居は此の刹那際定にして是れ仏の一切智種智の法性と為す故に。意は総じて一切の法界衆海會等の相體を括るに在り。學者をして往來自他を有らしめざる故に。今は却って往來して重會の見を作すも此れ將に不可となすべきなり。総じて王寶の印の一時に頓印するが如く、重會去來の見を作すべからざるを明かす。

(㊥ 36・七七二c~七七三a)

と。また「第九会普光明殿に在り」を明かす中では、

第二会普光明殿中より信心を起こし已り、五位始終の因果を経過するに、本跡諸仏果満旧普賢門を離れずと為す。十定品中於り亦其れ此の処は、法身の定体円に始終に通じ一際一処三法同一なるを以て普光明殿報居の宅を移さざれば、齊しく頭を並んで印じ重會三会去

已還來有ること無きを明かす。古人の此の会を釈して重會三会と為すも、普光明殿は法界門なるを以て世情思想の解を作すべからず。

(㊥ 36・七七三a)

と述べている文を見る。今以上の文から推察するに、彼は「四に総じて会数を陳ぶるを明かす」として十会を明かす中では、經説の次第にしたがって「普光明殿会」を三度数えているのであるが、実にその中の解釈は、この会が決して「重會」ではないことを示さんとしている意図がうかがえるであろう。古人の解<sup>(5)</sup>釈をそれぞれに挙げてそれを否定していることは、彼がこの「普光明殿会」を別会の説とみない立場をよく示している。これは筆者の推論であるが、彼がここで經説の順序にしたがって十会の中に「普光明殿会」を数えるも、「學者をして往來自他を有らしめざる故に。今は却って往來して重會の見を作すも此れ將に不可となすべきなり。総じて王寶の印の一時に頓印するが如く、重會去來の見を作すべからざるを明かす。」と述べていることを考えると、これは經説の形式に拘泥して陥りやすい我々の誤謬を正さんとする意図のもとに、この「普光明殿」を三度数える十會説を示したものであると思われる。それ故、先に疑問点としてあげた二種類の十會説は、決して彼の見解の不統合性を示すものではなく、そればかりかこの「普光明殿会」の一会なることの主張をより鮮明にしたものといえよう。そしてこのことは続いて、伝統的に「七処八會」或いは「七処九會」と見ていく立場からすれば、彼の「十處十會」説は誠に不可解なものであると言わなければならなかった

のであるが、この「普光明殿会」をこのようにどこまでも「三度の説は総じて是れ一処一時一法界一会の説なり」とする立場にあるとすれば、元來処数と会数の相違は「普光明殿」の登場回数に起因するものに他ならないのであるから、彼に於いてはその相違はなくてはなるべきものとの立場を証明することにもなるのである。したがって、彼が「十処十会」と処数と会数を同数として『華嚴經』をみていくことは、彼の見解からすれば当然の帰結ともいえるのではないだろうか。

以上、筆者はこの「普光明殿会」に対する彼の立場を考察することによって、「十処十会」という一見不可解に思われた彼の『華嚴經』の会座に対する見解に、一応首肯することができるのである。

### 第三節、法界品会

#### 一

それでは次に第八会以降について考察していくこととしよう。まず初めにその名称をしてみるに「第八、給孤獨園会・第九、覺城東大塔廟処会」とあることから、また会の順序からしても、これらが直ちに「入法界品」に関係しているものであることは想像できるであろう。もとより彼にとって「入法界品」は『華嚴經』の正宗分を明かすものであり、重要な位置を与えられているものである。それ故このように一品を二会に分けるといふ特別な形を用いているのも、さほど不自然な感じを抱かせ

ない。そしてまた既に法蔵が「入法界品」に対しては、

四に文を釈すとは、此の一品の中を大分するに二有り。初めに本会を明かし、二に「爾時、文殊師利童子は善安住樓閣より出づ。」已下は末会を明かす。

(35・四四一c)

と述べているように、「入法界品」を大きく二つに別けて考えていく見解を示していることもあって、李通玄はこの影響を受けたと見ることもできるであろう。その意味では李通玄のこの「第八会」・「第九会」を主張する立場も首肯するに難くないといえる。しかし、今この法蔵の区分に注目するとき、彼は「文殊師利童子は善安住樓閣を出づ」の箇所で一線を画している。つまり、舍利弗及び六千人の比丘達の登場は末会に属するものとしていく。それは、

十に文を釈すとは、今は五相の科に依りてこの文を釈す。初めの寄位修行相の中に就いて四十一知識あり。内において初めの文殊一人は十信の知識に寄當す。信は位を成ぜざるを以ての故に十人を弁ぜず。余の四位は成ずるが故に各十有り。初めの中に就いて二に分かつ。先に發起能化の縁を明かし、後に「爾時、尊者舍利弗は仏の神力を承る」の下は彼の化事を成ずることを明かす。……中略……二に化事を成ずる中に三会あり。則ち三段と為す。初めの撰比丘会の中に二有り。云々

(35・四五一c)

と善財の諸善知識について概説する中、文殊を以て十信を表わすものとし、二に化事の徳を明かす中に撰比丘会として、舍利弗を初めとする六

千人の比丘を教化する段を考えていく。これは善財童子の求道という点にストーリーの始終を認めるならば、当然初めの師である文殊の登場を以て開始とすべきであることからしても、法蔵の見解は自然なるものとして受け止めることができる。ところが李通玄は先述した「第九会」の名称から察しても、法蔵の見解とは多少異なった立場をもっているようである。即ち、「第九、覺城東大塔廟処会」ということは、法蔵の言う「撰比丘会」つまり舍利弗等の登場する箇所は先の「第八会」に属し、善財の登場を待つてこの会の開始としているのである。このことは単に彼が示す会の名称からいうのみではなく、彼が直ちに、

法界品の祇園人間を第八会と爲し、善財の大塔廟処を第九会と爲す。  
(㊥ 36・七七三 b)

と述べていることから疑いない。<sup>(8)</sup> それでは、李通玄は少なくとも法蔵の見解を知っていたと思われるがあえてその立場を継承せず、このように彼独自の見解を打ち出すのはどうしてであろうか。以下その点について考えてみることにしたい。

ところで、李通玄は会座については以上のような見解を示しているのであるが、ところが後に「入法界品」を解釈している箇所となると、別の見解を示している面もあるのである。というのは、『新華嚴經論』卷第三十三の中で、

此の入法界品の已前の一巻半余経は、但菩薩声聞世主あるも已に道を得たる者にして、未だ俗に処して凡夫の此の法門に入ること有ら

ず。「文殊師利從善住樓閣」より已下は、是れ人間に入り根に就きて俗に接し凡夫を化利して其をして此の法界の道理を得せしむるなり。  
(㊥ 36・九四八 c)

と述べているのがそれである。そしてこの「文殊師利從善住樓閣」以下の箇所を「就俗利生成行門」<sup>(9)</sup>と名づけ、さらにそれについて、

「文殊師利童子」より已下、經末に至るに長科して三段と爲す。

第一に、「爾時、文殊師利童子善住樓閣より」已下、六十二卷の初め「爾時、文殊師利菩薩諸比丘に勸めて阿耨多羅三藐三菩提を發し已わる」<sup>(10)</sup>に至る此の一段の經、名づけて創始就根入俗遊歷門と爲す。

第二に、漸次南行して人間を経歴して福城の東に至るは、是れ文殊の入俗人間にして、普照法界修多羅門を説く。

第三に、「爾時、文殊師利童子は福城の人の悉く已に來集せるを知る」<sup>(11)</sup>より已下直ちに經末に至るは、是れ根与法成行門を弁ず。

(㊥ 36・九四九 a)

との三分科をなしている。

或いはまた『決疑論』の中では、

此の一部の經に於いて略して十門を立て、以て進修の軌を知り、其れ(行者)をして未だ過を識り真に歸することを得ざるを免がれるを得しめんと望む。  
(㊥ 36・一〇一二 b)

として『華嚴經』全体を十段に区分する中、その第七以降第十までを

「入法界品」に該当させているのであるが、その区分の仕方は、

第七・成仏果満一切皆為法界門<sup>(12)</sup>……法蔵の本来に相当

第八・以仏果法利益人間門<sup>(13)</sup>……善住婆闍以下、舍利弗等の教化

第九・説教勸修門<sup>(14)</sup>……覺城以下、善財の宿因及び大衆の教化

第十・善財入位契真門<sup>(15)</sup>……善財の自己批判の偈頌以下、経末まで

である。

以上、このように彼は先に述べた「会」を解釈する立場と必ずしも一致した見解を示していないのである。特に「就俗利生成行門」との区分は、正しく法蔵の言う「末会」に相当しており、彼の独自の見解というよりも既に彼自身の見解の相違に疑念を覚えざるをえないといわねばならない。確かに既に李通玄は『新華嚴経論』を著わすに際して性急に筆をすすめたと思われるとの指摘がなされており、筆者もそれに賛同するものであるが、その点を想起すれば李通玄自身の見解に推移があったのではないかとの推定も浮かんではくる。しかしこの場合に限っては直ちにその様に結論付けるのは早計ではないかと思われるのである。もちろん「就俗利生成行門」との科門は彼の「会」に対する見解とは一致していない。けれども今注意したいのは、「就俗利生成行門」を大きく三段に分けているのであるが、それが全て文殊において区切られているという点である。このように彼が『入法界品』の構成を考えるに際して、文殊を数箇所に区切るとの配慮をしているということは、相当この文殊に注目していたといわねばならない。殊に『決疑論』の場合などは、「入

法界品」のみならず『華嚴経』全体を十段に別けて考えていく中で、第八以下三段をこの文殊の箇所において区切っていくことはその旨を充分に示しているといえる。尚、『決疑論』は「第十・善財入位契真門」を善財の偈頌を以て初めとしており、『新華嚴経論』とは善財の宿因を説く箇所を含めない点で、解釈の相違を示しているが、これはいずれにしても「入法界品」を文殊の箇所においてこの様に区切って考えていくわけであるから、彼に「文殊の登場」「善財の登場」「善財の発心」の三視点があつたことを物語っているといつてよいであろう。ならばそれは換言すれば彼は文殊と善財の登場方法に相当留意しているともいえる。確かに、彼は善財の求道に成仏の階梯をみていく立場があるから、善財が注意されるのは当然といえるのであるが、しかしこの様に文殊の箇所を三分科することは、善財の善知識としての文殊という立場より、求道者としての善財に対する視点が相当に強いものであるといわざるをえない。だからこそ文殊を善財の第一善知識として一つに纏めて考えることをせず、善財の登場を以て一つの区切りであるとする立場を示すものと思われるのである。したがって「会」の構成を考えるとき、この善財の登場する「覺城」を以て、一線を画すということになったのではあるまいか。そしてこの点はまた、

此の会（第八会）の中の六千比丘の如きは、是れ凡夫の文殊師利の所に於いて十耳十眼を頓明するを明かす。此の衆、路に居在して発心すると雖も境界は仏会を離れず。路上の発心は進修を表わすと為



し、是れ即ち其の仏会を離れざるなり。

(因36・七六五c)

と論じていることを勘合するとき、一層善財の登場をもって一線を画そうとしようとしている旨が明確になるであろう。と同時にこの文は、文殊の舍利弗等の教化の一段は仏会たる祇園会とは異なり路上発心として示されるも、それはまた仏会を離れざるものとしてあるものとの立場が呈示されており、それが路上発心は進修を表わすと論じられていることから、或いは李通玄はこの舍利弗等教化の一段を善財の進修の階梯の象徴とでもいうべきものと考えていたのではないかとの推察を生じさせる。というのは「離世間品」が、

離世間品は是れ一切諸仏が皆仏果を成じ、恒に自己の果行を以て常に生を利することを行す。

(因36・九二二a)

と論じられ、その行は「純利他行」として規定されていることを想起するとき、一面ではこの一段を祇園会の「離世間品」的位置として考えていたのではないかと思われるからである。そしてこのことは次に論ずる「第十・於一切国刹及塵中一切虚空法著会」とも関係していると思うのである。ともあれ「第九会」の区切り方については、善財の登場を重視した点と、舍利弗等の教化の箇所を善財の進修修行の中に含めて考えない立場とが李通玄にあったために、法蔵の「末会」の区切り方とは異なった立場に立ったものと考えておきたい。

## 二

さて、最後に「第十・於一切国刹及塵中一切虚空法界会」について考察しておくこととしたい。まずこの会の名称であるが、この名を示した後、さほど行間もなく「於一切国刹及塵中虚空法界一切会」と言い換えている。<sup>(19)</sup>尚、この相違は後の伝来中に於けるミスであると考えられるかもしれないが、しかしこれは李通玄没後約二百年に志寧の『合論』を条理改訂した慧研も、『新華嚴経論』と同じく使い分けているから、恐らく李通玄自身に帰するものと考えてよいであろう。<sup>(20)</sup>そしてこれが李通玄の変更と考えられるならば、千字足らずの間に何の説明もなく無造作に変更しているということは、この変更之余り深い意味はないともいえよう。しかしこの変更から「一切」なる語に多少重点がおかれたことは注意すべきかもしれない。

それではこの「会」が一体いかなるものなのかそれについて考えていくこととしよう。既に先人の指摘があるように、この「会」は『華嚴経』の特定の箇所を示したものではないといわれる。<sup>(21)</sup>筆者もこの見解を支持するものであるが、但この「会」の名称からして、「入法界品」の最後の普賢菩薩の箇所「一切世界」「法界虚空界一切世界」「法著虚空界一切……」等の語が多出していることから、普賢の法界に起因していることは間違いないと考えられる。<sup>(22)</sup>しかしだからといってこの「会」が必ずしも普賢善知識の箇所を指すものとはいえないようである。というのは、「第九会」に対して、

善財覺城東会の如きは、前の諸会の但且く五位の法に寄成するも、未だ能修行の人に寄顯せざるを明かす。覺城の一会の如きは、即ち能修行の人及び菩薩の攝生の方便の法則を明かすなり。

(㊥36・七七三c)

と論じていることから、彼は「第九会」において善財の求道の過程を全て統括しようとしていると思われるからである。彼が「覺城の一会の如きは、即ち能修行の人及び菩薩の攝生の方便の法則を明かすなり」と、「第九会」の特質を述べるも、「五位の法」を明かす点では「前の諸会」と同じである。「前の諸会」とは具体的には「普光明殿会」に統合される「名号品」から「離世間品」が考えられる。前回の「仏華品」を考察したおりに示したように、彼は重層的な形で『華嚴經』の構造を考えていく。それ故、彼にとって「出現品」は弥勒に相当し、普賢は「離世間品」に相当するものとして考えていったに相違ない。「離世間品」が普賢に代表されるものであり、また「仏果の後の恒行」を象徴するものであることは、「第九会」においては弥勒の後の普賢に相当するといえるのではあるまいか。「第九会」も「前の諸会」も俱に「五位の法」を明かすものである。善財という能修行の人をしてこれを明かしていく「第九会」に普賢を必要とすることは、彼の重層的な形で『華嚴經』の構造を考えていく立場からすれば当然のことであると考えられるからである。したがって「第十会」は必ずしも普賢を指すものであるとは思われないのである。それはまた第二節に課題として残した「第三に重ねて仏

の所説法処及び座体を叙ぶる」中ではどうして「第十二会」を記さなかったのかという点とも関係しているのではないかと思うのである。彼がもしこの「会」を記すとすれば恐らく「第十二会、於一切国刹及塵中一切虚空法界会」となるのであろうが、これを記していないということは、これが伝来途中における逸脱<sup>(23)</sup>、或いは彼自身の記し忘れと考えないならば、むしろこの「会」は『華嚴經』の具体的な箇所を指すものではなく象徴的・統合的なものとして考えていく立場があったからこそに記さなかったと言えるのではないだろうか。何故ならば逆にこれがもし善財の善知識としての普賢の箇所を指すものであったならば、必ずやその解釈をなしているに相違ないと考えられるからである。

それでは彼は何故この「第十会」を必要としたのであろうか。確かに彼は、

此の經中の諸法は皆十を以て円数と為す。但七処九会の説と言うべからず。(㊥36・七六二b~c)

古人の九会と云うとは、未だ十一地有りて第三禪に在りて説くを知らず。此の經総じて十法を准と為す。九を説くべからず。

(㊥36・七七三b~c)

と論じているように、円数である「十」という数に注意を払っている。この立場を重視すれば彼がこの「第十会」に対してもあえて「十会」とせんがためにこの「会」を補わねばならなかったとの理由が考えられるであろうが、筆者は決してこれだけではないと考える。何故ならば、先述したよう

に重層的な『華嚴經』理解を念頭においた上で「普光明殿会」が「刹那際諸仏三昧」に基づくが故に「一処一時一法界一会の説」として考えられなければならない所以を想い起こすとき、彼の立場の根底には、

七に仏の因果と同じきとは、既に是れ文殊の法身智身と、諸仏の果徳と、普賢の行門とは、本来一法にして、此の諸衆海皆悉く之れに同ずるが故に。初発心時に便ち正覺を成じ、一刹那際に於いて皆此の法を得とは、刹那際於り外に別時有りて得るを許さざるは、即ち本法に非ざるが故に。若し人有りて、仏法中に於いて仏の成道を見るに、劫量延促の処所を作りて見を生ずれば、信亦成ぜず。未だ修道見道を論ぜざるに、是の故に修道の者は是の如きの順情の所迷を作して、妄りに修道を云うこと莫れ。生死に輪転して休息有ること無し、此れ是の情量は是れ仏法に有らず。是の故に此の經の來衆、皆仏果位の法と齊しく、還<sup>また</sup>仏果位の法を成ずるなり。若し見聞悟入のもの有らば、皆仏果位に同ず。本智慧の法に依る為の故に。

(㊥36・七五四b)

と述べているように、一切の世界の法則或いは基盤とでも言うべき法界觀があったといわねばならないからである。そしてこの法界觀はまた、弥勒を見るの後、普門法界に入り、自ら其の身の普賢身に入るを見ると、正覺を成ずると雖も常に普賢行を以て衆生を利益す。即ち文殊普賢弥勒仏果の三人始終一処にして因に通じ果に徹するを表わす。此の三人の道、是れ古仏の大都、是れ源始の法際なり。

と論じられ、その普賢が、

普賢菩薩は恒に色身を対現して、一切衆生の前に在りて教化するに休息有ること無し。

(㊥45・七六八b)

普賢菩薩は彼の迷事に随いて、十方世界に色身を対現す。

(㊥36・九二五b)

普賢は大慈悲もて世間・衆生海に処す。

(㊥36・一〇四六b)

と論じられて、正しく純利他行として用き続ける法界行を示していることから、李通玄が『華嚴經』から導き出され、自身がこの如実なる法界内存在のものであることを確信していたことは疑いないであろう。そして又彼が「十方世界に人を利して息まず(㊥36・七七〇b)」「一切衆生の所依なるが故に法界と名づく(㊥36・八七六b)」と論じている文等を想起すると、この現実の一切衆生の母体であると同時に、それ故に用き続けているこの法界即ちこの世界こそ、彼の言う「第十会」であると結論づけるのは、果たして筆者の余りな偏見であろうか。

さて、以上から筆者は、重層的に『華嚴經』を読み取り、さらに実践的にそれを考えていったが故に、李通玄はあえてこの「会」を用いたのではないかと考える次第である。もちろん、この「第十会」に類似するものとして「十世」の「一念」があるであろう。<sup>(25)</sup>恐らくそうした考え方を李通玄が採用したであろうことは充分に考えられることである。そしてその立場からすればこの「第十会」は『華嚴經』の「会」を統括する

ごときものであるといえるであろうし、それはまた「普光明殿会」を内実としているものであるともいえるであろう。そしてそのように考えることに對して筆者は何等否定するものではない。しかし今、彼の実践的な華嚴經觀を思うとき、この「第十会」は恒に用き続けている法界の場としての「今」或いは「この現実」が、彼の脳裏にあったのではないかと考える次第である。

## むすび

以上、李通玄の「十処十会説」について考察してきたのであるが、まず第一の疑問であった処数と会数が同じであることについては、第二節において述べたように「普光明殿会」を「一会」と見ていく立場があるが故に同数になるのであって、この点についての疑問は解明できたといえる。次に「第八会」以降の「会」については、未だ筆者の推論の域を脱しておらず、多くの謬誤があると思われるが、その点については先学諸賢の御教示御指導を切に念願する次第である。但今は粗雑ではあるが「第八会」「第九会」の区分の仕方については、善財の求道に主眼を置く立場が認められることと、「第十会」については「離世間品」に対する彼の考え方からして、「離世間品」や「入法界品」の善知識普賢の立場をさらに重層的に考えていくと、今現に如実に用らく法界の場としての「会」の必要性が考えられたからであろうと、結論付けておくこととしたい。

## 註

(1) 拙論「李通玄の華嚴經觀——特に仏華品について——」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第七・八合併号)

(2) 筆者の檢べた限りでは『八十卷華嚴經』にも『六十卷華嚴經』にも、李通玄のいう經文は見当たらなかった。これは恐らく『八十卷華嚴經』「如来現相品」の「如来一音無有量 能演契經大海(因10・二六a)」の取意ではないかと思われる。尚『六十卷華嚴經』では「毘盧遮那仏品」の「如来所説一語中 演出無辺契經海(因9・四〇五c)」に当たる。

(3) 確かに「十定品」は「爾時世尊、摩竭提国阿蘭若法菩提場中に在して始めて正覺を成じたまい、普光明殿に於いて刹那際三昧に入りたもう(因10・二一a)」とあり、「阿蘭若法」と「於」字の有無にその相違を見るのみであって、彼のこの引用は納得できるのであるが、しかし、「離世間品」は「爾時世尊、摩竭提国阿蘭若法菩提場中に在して、普光明殿において蓮華藏師子の座に坐したもう。(因10・二七九a)」とあって、「始成正覺」や「刹那際三昧」の語は見ない。勿論、「刹那際三昧」は「十定品」のみで説かれ「十定品」を代表する三昧であって「離世間品」にその名を見ないのは当然であるのであるが、李通玄の叙述からすると「十定品・離世間品の如く、皆『爾時世尊、摩竭提国菩提場中に在して始めて正覺を成じたまい、普光明殿において刹那三昧に入りたもう』と云う」と述べているように、「離世間品」においても「十定品」と同じ文があるものとして考えていく。これは一見不可解に感じられるかもしれないが、しかしこれこそ彼の見解の独自性を物語るものである。それは彼が「始成正覺」に注目して「五周遍周因果」において『華嚴經』を理解していることによって知ることができるが、今ここに挙げた文中では「一時の際に於いて其の理事を會し、無作の定門を離れず。十定門を以て是れ法界の体となすが故に。普賢行を以て是れ法界の用となす。即ち離世間品是れなり。」がその基本的立場を示しているといえる。

(4) 此の会を重視していることは、彼の三聖円融思想とも大きく関係している。それについては後日論することとするが、今はこの会が法界を象徴する重要な会である旨を述べる彼の文を二・三挙げておくこととする。

① 普光明殿は是れ仏の智用果満報居の本宅なるを以て、還りて中より信位の法門を説く。果を説きて信を成ずることを明かし、既に果徳を信するが為なり。茲より以後十地十一地仏華品に至る已来は、方に入道進修五位成滿階降の同別を明かす。一通一切通なれば、因より果に至るに時を隔てざるが為の故に。皆根本不動智等の十箇仏を以て、以て所信の門と為す。還自心の根本不動智仏を以て、以て会の体用と為す。(因36・七六三c)

② 此の普光明殿を明かすに、是れ如來自性一切智種智の都体なり。

(因36・七七二c)

③ 始成正覚とは、兜率天於り神を下降り受生し説法して涅槃に入るに、総じて始成正覚の一刹那際三昧の時を離れざるを明かすが故なり。此の經四品の内、皆共に同じく此の言有るは、普光明大智の体に時分無きを明かす。其の殿の体を明かすに是れ智の報境なり。智を以て名を成じ、境と智と無二なるを以て、所居の殿の体は、皆三世多劫を含み、時の収に属さず。古今去来の体無きなり。(因36・九二三a)

(5) ここにいわれる古人が一体誰を指すか明確には解らないが、例えば法藏は『探玄記』巻第十七に「離世間品」を解釈している中で「二に会の名とは、処に約せば普光重会と名づくるなり。(因36・四一八b)」と述べ、重会説を主張しているのを見る。但し、周知の通り『探玄記』は『六十卷華嚴經』の注釈書であって『六十卷華嚴經』にはない「十定品」を初めとする「第八会」の中で示される「古人」が法藏かどうかは解らない(「普光法堂」とは『六十卷華嚴經』の訳語であり「八十卷華嚴經」の訳語は「普光明殿」であるからこの箇所はどうしてこの語が用いられているかは不明である)。尚、慧苑と李通玄との影響関係が現在のところははっきりしていないが、慧苑はこの「十定品」の「普光明殿会」を解釈するに際して『刊定記』巻第十二の中で「此れ重会普光明殿会と名づく(正統一・五・二四一右下)」と明言している。

(6) 例えば『新華嚴經論』巻第八の中には「此の經四十品中、法界品を以て正宗と為し、余品を伴と為す。(因36・七七〇b)」と述べる文を見よう。李通玄は「入法界品」を以て一經の正宗分としている。

(7) ⑨・六八六c。⑩・三三〇b。

(8) このことについては『新華嚴經論』巻第七(因36・七六五c)七六六a)においても述べられている。

(9) 『新華嚴經論』巻第三十三に、

「爾時、文殊師利童子(因10・三三〇b)」已下、名づけて就俗利生成行門と為す。(因36・九四八b)とある。

(10) ⑩・三三二c。尚、これによって李通玄が見ていた『華嚴經』のこの箇所は大正大藏經所収のそれと丁卷が一致していたことが認められる。

(11) ⑩・三三二b。

(12) ⑩・一〇二〇b。

(13) ⑩・一〇二〇b。

(14) ⑩・一〇二〇c。

(15) ⑩・一〇二一a。

(16) 小島岱山「『新華嚴經論』の研究序説」(印度学仏教学研究第三十三巻第二号)参照。

(17) 註(1)参照。

(18) ⑩・七六三a。⑩・七六六a。また『新華嚴經論』巻第九では「虚空法界一切処会(因36・七七三b)」と述べている。

(19) 『新華嚴經論』と正統藏經所収の『華嚴經合論』との間には、移動・補足・省略等の改訂が数多く見られ、決して『新華嚴經論』をそのまま『華嚴經』と『会本』にしたものであるとは思われない。それはまた『合論』の巻頭に付されている慧研の「序」に示すように志寧の『合論』に改訂を加えたところから、これら二論間にこのような相違があつて当然であり、これから逆に正統藏經所収の『華嚴經合論』は志寧のものではなく慧研のものであらうと推察されるのである。さて、この慧研も李通玄のこの会の名

称の変更をそのまま伝えていることは、彼がこの『合論』を作成した年代が乾隆五年（九六七）であることからして、恐らく李通玄自身が変更したものであると考えられるのである。

- (20) 湯次了榮著『華嚴体系』二三四頁。小島岱山「新華嚴經論の文献学的並びに注釈学的研究」（『仏教学』第一八号）。

- (21) 「一切世界」「法界虚空界一切世界」「法界虚空界一切……」等の語は『華嚴經』卷第八十（因10・四四〇）に屢説されているし、また「第十会中於一切国刹及塵中虚空法界一切会とは、即ち十方世界虚空法界及び纖塵の内及び一切衆生身体毛孔海会なり（因36・七六三a）」と論じられる中「毛孔」の語に注目すれば、これもやはり普賢の箇所（因10・四四〇）に多出しているからである。

- (22) 註（1）参照。

- (23) 『新華嚴經論』卷第四十に「善財は慈氏の所に於いて一生の仏果を得、普く一百一十城の法門を印ず。（因36・一〇〇五a）」といわれ「出現品」が「如来は眉間の放光及び口中の放光を此の二大士に加うるは、即ち五位の教門の始終の畢りを明かす。（因36・七七1a）」と論じられていることからして、「出現品」と「弥勒」とが同じ位置付けにあるものと考えられる。

- (24) 『華嚴經合論』卷第五十四も『新華嚴經論』と同じくこの「第十二会」については全く述べていない（元統一・六・二〇九〜二一〇）。

- (25) 周知の通り法蔵教學においては、三世は十世として考えていく立場がある。それは三世に各々三世を含むとして九世となし、そしてそれに全てを統括する一念を加えて十世となすのであるが、今この「第十会」に対してもこの十世と同様全てを統括する「会」としてこれ考えたと思われることも可能であろう。しかしこれは思考の形式としては確かに影響したといえるであろうが、「入法界品」「離世間品」の二品を以て「二種常道仏果」と規定していく彼の立場を鑑みると、やはり如実なる法界の場としてこの「第十会」を考えていたのではないかと思うのである。